芹霊と
１００人の元カレ
５

芹霊と１００人の元カレ　５

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20257186

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 芹霊, 本番無し, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, もぶお兄さん×霊幻, 輪姦, 無理矢理

芹霊前提、師匠総受けです。もぶお兄さん×師匠（別れています）が含まれます。今回は♡喘ぎ、濁点喘ぎ、輪姦、無理矢理、薬物表現、暴力表現があります。倫理がアレです。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

ネタバレ
芹霊は別れません
本番有りはpixiv以外のどこかにあります

芹霊と１００人の元カレ　５

このお話は、１００人の男に捨てられた師匠と、真っ直ぐな芹沢さんが、元カレたちを乗り越えて幸せな未来を掴むお話です。

※

芹沢をはじめとした超能力者部隊の面々が座る前に置かれた会議机の上に、ずらっと銃が並んでいる。
「全員着席したか？それじゃあ第１回火器演習を行う。許可するまで口を開くな。質問は手を上げろ」
（演習なのに、室内？）
芹沢はそう思ったが、手を上げる程の事では無かったので黙っていた。
部屋の中はヨシフが吸った煙草の煙でもうもうとしている。
「俺は能力上特別に吸ってるが、基本的に火薬を扱う時は火を使うなよ」
かちゃ、とヨシフは芹沢から見て１番左の小さめのリボルバーを手に取った。
「これはミネベアミツミ社製、ニューナンブM60だ。回転式……いわゆるリボルバーで、38口径だ。口径というのは薬莢……弾丸の後ろ部分の直径から来ていて、コレの場合は0.38インチだ。弾薬の仕分けにこのインチ表記を使うから、いちいちミリメートルに直さなくていい。商品名みたいなもんだ。そのまま覚えろ。ニューナンブは５発弾が入る。主に日本の警察が使っている」
ヨシフはニューナンブを置いて、隣の自動式拳銃を手に取る。
「これは陸上自衛隊で使われている、自動式拳銃だ。オートマチックと呼ばれるやつだな。ヘッケラー＆コック社製、SFP9だ。9x19mmパラベラム弾を使用する。9mm口径。15発装弾だ」
ヨシフはSFP9を置き、大振りな自動小銃を手に取る。
「これは陸自で使われている自動小銃、豊和工業製ニイマル式

5.56mm小銃だ。いわゆるアサルトライフルだな。89式5.56mm普通弾を使用する。5.56 mm口径、30発装弾」
ヨシフはアサルトライフルをテーブルに戻し、次の銃を手に取る。
芹沢たちは一所懸命に、配られたプリントにメモを書き込んでいた。
「……良く見かけるのはこの辺りだ。さて、ここでクイズだ。芹沢、コレは？」
ひょい、とヨシフは自動拳銃を持ち上げる。
「あ、ヘッケラー＆コック社製、SFP9です」
「正解だ。これには弾がいくつ入ってる？」
「あ、15発です」
ヨシフは目を細めた。
「──不正解だ」
ちゃき、とヨシフは芹沢に向かって銃を構えて。
「──っ！？」
瞬時にバリアを展開した芹沢に、銃弾をぶっぱなした。
ガゥン、ガゥンと銃声が会議室に響く。
しばらくして、カチ、カチとトリガーが空の音を立てた。
「……っ、16発、でした……」
「そうだ。このようにチャンバーに１発入ってることがある。覚えておけ」
なるほど演習、と芹沢は滲み出た冷や汗を拭った。
「あと芹沢、できたらバリアで弾いた銃弾の跳弾にも気を付けろよ」
言われて見回すと、周囲の煙が芹沢の弾いた銃弾をキャッチしていた。
「はい……」
別の超能力者の前にヨシフは移動する。
「これは何発入ってる？」
「ニューナンブなので……ご、５発です」
「……不正解だ」
ヨシフは銃を向ける。
撃鉄を起こして発射される銃弾を、バリアで防いでいるが、少しず

つヒビが入っているのが芹沢からは見えた。
（──危ない！）
芹沢は割れたバリアの内側に、咄嗟にバリアを張った。
「……いい判断だ、芹沢。そうやって周りをサポートするのは大事だぞ。でないと８０キロの血液袋を背負って歩くハメになるからな。◯◯、お前も自分のバリアの耐久力がこれで分かったな？……何発だった？」
「４発、でした」
「そうだ。フル装填されてるとは限らない。銃を手に入れたら、残弾数は必ず確認しろ」
カツ、と音を鳴らしてヨシフが移動する。
そうして超能力者たちはヨシフのスパルタ授業を耐えた。

※

（今日の分のバイト代がもう振り込まれてる）
芹沢はスマホで口座を見て喜色を顔に浮かべる。
「よう、大丈夫か？芹沢」
「あ、ヨシフさん」
「嬉しそうだな？」
「そりゃあ、訓練受けさせてもらえて、お金まで貰えるんですもん。得した気分です」
ヨシフは肩をすくめる。
「タフだな、お前は。いいことだ」
ヨシフは口元にゆっくりと煙草を持っていく。
「……超能力者のお前らに、何で銃の訓練を受けさせるか分かるか？」
「敵の装備の把握やバリアの耐久力を知るためですか？」
「それも正解だ。だが本当の理由は、ノーマルを守るためだ。俺たちが現場に出る時、ほぼ確実に他の軍人や警察官と一緒に出ることになる。もちろん俺たちはサポートするが、基本的に他の仲間も自分の身は自分で守ってもらわなくちゃならない。そんな時、仲間の武器のことぐらい把握してないと、困るんだよ」

「なるほど」
ふっ、とヨシフは目を細めて小さく煙を吐き出した。
「１つ、ゲームに付き合ってくれ。特別授業だよ。想像してくれ。お前に与えられた任務は、人質の救出だ。俺たちは何百人と殺戮してきた凶悪なテロリストの殲滅部隊に入っている。たくさんの仲間を失いながら、俺たちはテロリストのアジトへの侵入に成功した」
「ふむふむ」
「人質を無事に保護できた。そしてお前だけがテロリストの首魁に近づく事ができるようになった。さて、お前はどうすべきだ？」
「テロリストのボスを捕らえます！」
「はい任務失敗。お前がテロリストのボスと戦ってる間に、人質は死にました」
「えっ！？だって人質は保護したって……」
「お前の任務は人質の救出だっつったろ。人質は病気を持っていて、すぐ病院に運ばなくてはいけない状態だった。それは見た目で分からないものだったんだよ」
「そんな情報、無かったじゃないですか……！」
「現場では情報なんて大抵後手々々だよ。だから命令ってのは最悪の事態を想定して出される。忘れるなよ。いつだって人命優先だ。映画じゃねぇんだ、敵を倒すよりも、人を助ける方が重要な場面は多い。……優先順位を間違えるな」
よいしょ、とヨシフは椅子から立ち上がる。
「……はい」
芹沢はヨシフの背中を、じっと見つめていた。

※

「うわ、またか……」
ドアノブに白濁した液体がかけられていて、訓練と仕事で疲れていた芹沢は思いっきり握ってしまった。
適当に手とドアノブをティッシュでぬぐって、芹沢は部屋に入る。
かた、とドア備え付けの郵便受けが鳴った。
「暇だなあ、本当に」

『早く霊幻新隆と別れろ』と書かれた封筒を開けると、仕事中の芹沢の写真や、アパートに向かう写真がぎっちりと入っていた。元カレ連合からの嫌がらせだ。
（うっとおし……でもこの人たち、霊幻さんとよりを戻したいから、霊幻さんには何もしないんだよなあ……嫌われたくないから）
なら、まあ、いっか、と。

芹沢は油断していた。

※

「こんにちは。ご相談ですか？ソファーへどうぞ」
昼の相談所。花沢が手慣れた様子で接客する声を聞いて、出張で不在の芹沢に代わって霊幻がお茶を淹れに給湯室に向かう。
「こちらのソファーにどうぞ」
案内しようとした花沢の。
「ぐうっ！？」
首に客は……いや客を装った暴漢は、手刀を叩き込んだ。
「テルくん！？」
叫び声に慌てて霊幻が給湯室から出てくる。
ぐったりとして喉にナイフを突き付けられている花沢に、霊幻は硬直した。
「おい、久しぶりだな、新隆？」
「鬼彦夫……っ！」
元カレの１人だ。
「えらくいい男と付き合ってんじゃねえか。ええ？ムカつくなあ……」
「やめろっ！」
ぺたぺたとナイフで花沢の頬を叩く男に霊幻は手を差し出す。
超能力者と言えども、気絶させられてはどうしようも無かった。
「うるせえな、動くんじゃねえよ！刺すぞ！」
「……っ、何の用だ……！」
「別に？最近幸せそうにしてたから、ブチ壊してやろうと思っただ

けだ……おい、連れてけ！」
事務所の入り口から男が２人入ってきて霊幻を引っ張る。
「やめっ……！」
一瞬抵抗しかけた霊幻は、しかしナイフを突き付けられている花沢を見て、大人しくついて行った。

※

「おい、おいしっかりしろ花沢！何があった！？霊幻はどうした！！」
事務所の中から響くエクボの言葉に、芹沢は青くなって駆け出す。
「何かあったの！？」
事務所に入ったのと、花沢が目を覚ますのはほぼ同時だった。
「くそっ、やられた……」
花沢はエクボに支えられながら、苦虫を噛み潰したような顔をした。
「恐らく元カレ連合の人間です。芹沢さんと霊幻さんの付き合いが順調だから、しびれを切らしたのでしょう」
「過激派がもう動き出したのか！？しまった、霊幻の身が……！」
「元カレ連合って、俺だけ襲うんじゃなかったの……？」
芹沢が戸惑ってエクボに訊く。
「いつもは俺たち穏健派が今カレを襲撃して終わるんだ。それか、この時期になるとだいたい今カレと霊幻が険悪になってるから……くそっ、お前らが順調すぎたんだ……！」
理不尽だと怒りたくなる心を、ふうっと一度息を吐いて芹沢は落ち着ける。
（優先順位を間違えるな）
「……霊幻さんの行き先って分かったりする？ほら、連合のアジトとか、そんなの」
エクボは首を振る。
「俺様はアジト全部まで把握はしてない。霊幻は探知できねぇし……待てよ。花沢、お前はそいつのことを知らなかったんだよな？」

「ええ」
「つーことは、少なくとも花沢の部下じゃねぇ……うーん、他の幹部に当たって、しらみ潰しに部下の居場所探るか……」
花沢は頷いて、将に電話をかけ始めた。
「あ、律か？俺だ、エクボだよ。実は、霊幻が……」
（どうか無事でいてください）
芹沢は祈りながら、無駄だと分かっていても、警察に電話をかけた。

※

「オラッ！服脱いで足開け！」
どん、と霊幻は見知らぬマンションの一室にひかれた布団の上に突き飛ばされる。
「まあまあ鬼彦夫さん、そんなに乱暴にしないで。傷モノにしちゃあ萎えるでしょう？」
にやにやと細身の黒縁メガネの男が霊幻の頬に触れる。その手をパシっとはたいた。
「触んな、苦源！」
メガネの男は反抗されたことに腹を立てて、霊幻の腹に靴の爪先を打ち付けた。
「がはっ……！」
吹っ飛んだ霊幻が腹を押さえてうずくまる。
「あーあーあー暴力振るうから！新隆が私を殴ったから、酷い目に遭ったんですよ？ほら、ごめんなさいは？」
「ふ、ふざけ……っ！」
ガン、とメガネ男は霊幻の顔を床に打ち付けた。
「新隆、ごめんなさいは？」
「ご……ごめんなさ……っ顔は、顔はやめてくれ……っ客商売だからっ……」
手で顔を庇う霊幻に満足そうにメガネ男は微笑む。
「よく言えました」
うっそりと笑うメガネ男が、太ももをねっとりと撫でまわすのに、

霊幻はぞっとした。
「あー、結局顔ダメにして〜w」
ニヤニヤと笑いながらチャラ男がビデオカメラを回す。
「瀬辟……っ！」
それもまた、元カレの１人であった。
「こ、こんなことをして……っ！ただではすまないぞ！」
「分かってないなぁ〜？新隆ぁ？元カレ連合のトップは政治家や警察だぜ？もみ消して貰えるに決まってんだろ」
チンピラがやわく霊幻の手を靴で踏みながら言う。
「元カレれんごう……？な、何言って……」
「あ、やべ。連合のこと新隆には言っちゃ駄目なんだっけ？」
「どーでもいーよ。どうせ新隆はもうここから出られないんだからさ」
くすくす笑う元カレたちに霊幻の血の気が引く。
「ど、どういう意味だ……っ！」
「新隆はこのままここで俺たちの肉便器として一生を終えるってこと♡」
思わず逃げ出そうとした霊幻の手を踏む力を、チンピラが強める。
「いた……っ！」
「次逃げ出そうとしたら手ェへし折るかんな？」
「……っ！」
霊幻の身体が固まる。そういうことをする奴だ、と良く知っていた。
「服脱げっつってんのに、言うこと聞かねぇなあ……」
ばつ、とチンピラが霊幻のシャツを左右に無理矢理開く。ボタンが引きちぎれて飛んで行った。
「やめっ……！」
みじろぐ身体をメガネ男に抑えられながら、首元からネクタイが抜かれる。
「……っ」
男たちがスーツとシャツを手首まで脱がせる。霊幻は後ろ手に拘束されてしまった。
「おい、アレ持ってこい」

チンピラの呼びかけにチャラ男が頷く。
隣の部屋から戻ってきたチャラ男が手にしている注射器に、霊幻の血の気が引いた。
「やめ、やめろ！やだっ、誰か……！」
「はーい、新隆が素直になるお薬ですよ〜w」
ぶづ、と無遠慮にチャラ男は針を霊幻の肘の内側に刺す。
「あ……あぁっ……」
押し込まれていく液体を、呆然と霊幻は凝視していた。
「最っ……低……だ……！」
「何とでも言えよ。これでお前はおしまいだよ、新隆」
ぎりぎりと睨みつける霊幻を、チンピラは鼻で笑う。
「あれからコイツも年食ったからなあ。劣化してっだろうけど、さて……」
チンピラやメガネ男は霊幻の胸や腹を撫でまわした後、ズボンに手をかけた。
「相変わらずお綺麗な肌で……また根性焼きで銭湯行けない身体にしてやろうか？」
「やめっ……！」
「蓮コラ萎えるんでやめてくださいw」
「分ぁかってんよ」
軽口を叩きながらチンピラは霊幻の足からズボンをはぐ。
「うっそだろ……何食ったらこの身体維持できんだ？」
チンピラが太ももに顔を埋めて歯形をつけたのに、霊幻は息を呑む。
「や、やめろッ……！」
「新隆〜♡」
くちゅ、とメガネ男が霊幻の唇を奪った。
「ん、んッ……！」
じたばたと暴れる足にチンピラは舌打ちする。
「まだ抵抗すんのか？おい、あと２本持ってこい。シャブ漬けにする」
「ほどほどにしてくださいよ？完全にラリっても新隆らしくなくて面白くないんですからw」

そう言いながらも、チャラ男はドラッグを取りに行く。
「んん゛ッ！んーッ！！」
涙目で暴れようとした霊幻の身体を、メガネ男がしっかりと押さえ込んだ。
「ん……ッ！」
注射器で薬を流し込まれて、じわじわと霊幻は絶望を味わう。
芹沢が、茂夫が、相談所が、遠く感じた。
「ちょっとずつ効いてきたか？」
力が入らなくなってきた霊幻の足を、チンピラが手のひらで味わうように撫でる。
「はっ……はっ……ぁうっ！」
ようやく口が開放された霊幻の、性器を下着越しにぎゅっと握る。
「きもちーだろ？キメセクはクセんなるぜぇ？良かったなぁ？」
「うっ……やだ……せりざわっ、せりざわぁっ……！」
焦点が合わなくなってきた霊幻の助けを求めて彷徨う手を、メガネ男が自らの股間に誘導する。
「なにそれ、彼氏君の名前？かわいーことするじゃん」
嘲笑いながら、メガネ男が霊幻の胸にキスマークを残す。
「あ、新隆のメールの１番上にいるじゃん、芹沢w」
チャラ男は霊幻の携帯を動画モードにする。
「いぇーい芹沢君、見てるー？今からお前の恋人ぶち犯しまーすww」
「やめっ……！」
ピロリン、とメールの送信音が響いた。
「あ……あ……」
霊幻の冷たくなった手が、虚しくシーツを引っ掻いた。
「これで今の彼氏とも終わりだなぁ？」
「うっ……うぅっ……」
とうとう泣き出した霊幻に元カレたちはゲラゲラ笑う。
「大人しく俺とよりを戻しときゃこんな事にはならなかったのになぁ？」
下着に手をかけるチンピラに霊幻は息を呑む。
「やっ」

思わず下着を押さえた手を、バチィとチンピラが叩いた。
「痛っ……！」
「おい痛い目に遭いたくなきゃ逆らうなってんだろうが。……本当に俺は後悔したんだぜ？なんでこんな最高の……奴隷を手放しちまったんだろう、ってな！」
わかるー、とチャラ男が笑う。
「新隆家事完璧だし、身体を売ってでも金用意してくれるから、最高の性奴隷なんだよなー。今の彼氏は知ってんの？お前が身体をきったねぇオッサンに売ってたこと」
「せっ、せりざわには、言わないで……」
「あっごめーんw手が滑って送信しちゃったわww」
「あ……あ……」
とめどなく涙が流れ、霊幻の手が虚しく宙に伸ばされた。
「あれ？急に大人しくなったじゃんw」
「そんなに芹沢君に捨てられるのショックなんだ？かわいそー」
「だいじょうぶだよ新隆、俺たちが可愛がってやるからさぁ……飽きるまでは、だけどw」
「飽きたら俺にくれよ。ストレス解消のサンドバッグ欲しかったんだよなぁ」
げらげらと元カレたちの哄笑が霊幻を追い詰める。
「ぅ……ぁ……」
「お？そろそろキマってきたか？」
ぐいっと乱暴にチンピラが霊幻の性器を握った。
「っあ……！」
「カウパーだらだらじゃねーかよw犯されるの期待してんじゃねーよこのクソビッチがww」
薬で追い詰めておきながら、チンピラたちは霊幻の精神までをも辱める。
「ゃっ♡ああっ♡」
だが正気を失い始めている霊幻には、ろくな反撃が出来なかった。
「ほら、しゃぶれよ霊幻センセー♡お口はお上手だろ？」
メガネ男が押し付けてくるグロテスクなチンポから、かろうじて霊幻は顔を逸らす。

「オイ拒否ってんじゃねーぞクソが！」
ばしっ、と顔を殴られた。
「う、っ……」
「いいか、ちゃんと咥えなかったらまた殴るからな？」
「……っ」
霊幻は仕方なく口を開ける。
「ん……ッ！」
酷い臭気を放つチンポが、霊幻の綺麗な口に押し込まれた。
「あっ♡あっ♡きもちぃー♡」
へこへことメガネ男は汚いケツを振る。
「じゃあ俺はこっちで楽しませてもらうかな」
霊幻のカウパーをチンポに塗りつけ、ぐちゅぐちゅとチンピラはアナルの入り口を亀頭でこねた。
「いくぞ……っ！」
「んんんんんんんん！」
霊幻の足が虚しく宙を蹴った。
「ぃやっやだぁああぁっ！ごめっ、ごめんっせりざわっ……！」

「謝らないでください、霊幻さん」

元カレたちのカメラが、スマホが、弾け飛んでバチバチと音を立てる。
「もう大丈夫ですよ。行きましょう」
芹沢は元カレたちを無視してつかつかと霊幻に歩み寄る。
「ズボンだけ履かせますね。気持ち悪いでしょうけど我慢して下さい」
「やっ、せりざわっ、見ないで……！」
「大丈夫、大丈夫ですよ。……生きていてくれて良かった」
芹沢は霊幻にズボンを履かせて、スーツの上着をかける。
「お、おいお前っ！顔覚えたぞ！？テロリストの仲間だった奴だろ！！お前がしたこと新隆にバラしてやるからな……！！」
「ご自由に。今は忙しいので何もしませんが、」
（優先順位を間違えるな）

「次その顔見たら、俺がしたこと（・・・・・・・）をあなた方にするので」
カツカツと霊幻を抱き上げて遠ざかる芹沢に、ひく、と元カレたちの喉が引き攣る。
「チクショウ、このままで引き下がれるかよ……！！また新隆をさらって……ぎゃっ！！」
チンピラが吹っ飛んだ。
「うわ、俺様の部下じゃねーか……最悪、だッ！」
「あがっ！！」
エクボの黒光りする革靴が、ドカッとチンピラを蹴り上げた。
「エ、エクボさんっ、どうして……」
「どうして？それぁ俺様の台詞だろーがよ。良くも俺様の新隆にめちゃくちゃしてくれたなぁ！？あぁ！？」
「がっ！！」
肋骨を踏まれてチンピラが悲鳴を上げる。
それを見てメガネ男とチャラ男が這いずるように逃げ出した。
「どこに行くんだい？」
が、光る鞭が２人を捕える。
「よくも僕をダシにして新隆さんを攫ってくれたね……？君たちにはたっぷりお礼させて貰うよ」
「ひ、ひぃっ！」
震え上がるチンピラたちの前に、坊主頭の男が煙草を咥えながらゆっくりと現れた。
「あっヨシフさん！助けてください！！」
すがるような声をチンピラが上げた。
「……俺は優しい方だと思うぜ？この現場にあいつら（・・・・）を連れて来なかったんだからな」
「ヨシフさん……？」
ふっ、と小さくヨシフは煙を吐き出す。
「お前らやりすぎだよ。流石に俺でも庇えねえ。幸い証拠はたっぷりある。刑務所でしっかり反省しろや」
「そ、そんな……！」
絶望するチンピラの襟を掴んで、エクボが拳を上げる。

「やめろ」
ヨシフの静止にエクボは舌打ちした。
「……顔はやめておけ。誤魔化しが効かないからな」
「「りょーかい」」
「そんな……！！」
絶望するチンピラたちに対して、にっこりとエクボと花沢は微笑んだ。
「た、たすけ……っ！」
「You are my sunshine♪ my only sunshine♪」
煙草をくるくるともて遊びながら、ヨシフは退屈しのぎに口ずさむ。
「ギャアっ！！足が、足が折れた……っ！」
「You make me happy♪ when skies are gray♪」
すぅっ、と大事に使っている煙草ケースを眺めながら、ヨシフはブラックジャックのレモンフレーバーを楽しむ。
「死ぬっ……！死んじゃうぅ……！」
「You'll never know dear♪ how much I love you♪」
ヨシフは煙草ケースの『Ａ ｔｏ Ｊ』の文字を撫でる。
「殺してくれぇ……っ！」
「Please don't take my sunshine away...♪」
ヨシフは満足げに目を細めた。

注釈：You are my sunshine……去り行く恋人を恨みに想う歌

※

（病院、病院に連れて行かないと……！）
芹沢は霊幻を抱え、全速力で屋根の上を跳んでいく。
「おいっ、何やってる！？めちゃくちゃ目立ってるぞ！」
「峯岸君……！！」
芹沢の古馴染みが植物の傘で辺りを覆ってくれた。
「れ、霊幻さんが……！！酷い目に遭わされて……！！早く病院に連れて行かないと……！！」

ちらりと霊幻を見て、植物使いの峯岸は眉を顰める。
「……薬物だな」
芹沢は頷いた。
「ちょっと見せてくれ。この感じは……」
峯岸は霊幻の目を覗き込む。
額に手を当てて、能力で探った。
「……！大麻だ！おい芹沢、お前の家はこの近くか！？」
「う、うん」
「アルカロイドで良かった……っ！植物成分なら僕がなんとかできる！！一刻を争うぞ、早く芹沢の家へ！」
「分かった……！！」
芹沢と峯岸は植物に隠れながら、アパートに急いだ。

雪崩れ込んだアパートで、芹沢はそっと霊幻をベッドに寝かせる。
峯岸は腕まくりをして、霊幻の額と肺の上に手を当てた。
「脳から植物成分を除去して、肺から取り出す。脳が報酬系として覚える前に除去しないと……全力を出すから、話しかけないでくれ」
「わ、分かった」
頷いた芹沢のスマホに、将から電話が掛かってくる。
『あもしもし芹沢？今から福田をそっちに向かわせるわ。治癒系能力者な』
「将くん……」
『何があったかは霊幻さんの口以外からは聞く気ねーから。怒りで暴走しちまう』
「……ありがとう」
しばらくすると治癒能力者も合流して、霊幻に力を流し込み始めた。
「少なくとも顔は綺麗にしないと……」
「お願いします」
芹沢は祈るような気持ちで２人の背中を見守る。
朝まではあっという間で、永遠とも思える時間だった。
「……よしっ、成功だ！」

峯岸は霊幻の口から白い粉を取り出す。
「こちらも腹のアザまで、綺麗に治せました」
福田も額の汗をぬぐった。
「良かった……」
へなへなと芹沢は座り込む。気がつけば立ちっぱなしだった。
「あの、さしでがましいかもしれませんが……治癒したのは傷だけなので、その……性病の検査は、病院でした方がいいと思います。それじゃ……」
芹沢は息をのむ。霊幻に精神的負担をこれ以上かけたくない。
（どうしたら……）
芹沢の脳裏に、頼もしい坊主頭がよぎった。
「……っヨシフさん！」
思わず芹沢はヨシフに電話をかけていた。
『……どうした？』
「すみません、早朝に……！あの、その、霊幻さんが、酷い目に遭ってしまって……！本人に知らせずに性病検査を受けさせることってできませんか！？」
『……ちょっと待ってろ』
保留音が流れる。
『できるぞ。２週間後に静岡基地に連れて来い。性病はそれぐらい時間が経たないと分からないからな。霊幻には……そうだな、検査結果を研究試料にさせてくれたらタダで健康診断受けさせて貰えるって言え。あいつなら飛びつくはずだ』
「ありがとうございます……！」
『どういたしまして。じゃあな』
芹沢も電話を切る。
「じゃあ僕も帰るから……」
「ごめん、今度お礼させて」
「いいよ、貸し１つってことで。じゃあね」
峯岸を見送って、霊幻のかたわらにひざまずく。
「良かった、生きてて……本当に良かった」
そっと前髪を撫でると、霊幻が目を覚ました。
「あれ……？」

「霊幻さんッ！大丈夫ですか！？」
ぼんやりと霊幻は芹沢を見る。
「俺、相談所にいて……ん？それから、どうしたんだっけ？？」
（記憶が……！！）
戸惑う霊幻に芹沢は唾を飲み込む。ドラッグの影響か、意識が混濁していているようだった。
「うわっ！？お前キスマークつけたのか！？」
胸元の赤い跡に霊幻は声を上げた。
「……っ、そうなんですよ」
芹沢は作り笑いを浮かべる。
「すみません、酔ってる霊幻さんにハッスルしちゃって」
「いいけどさ……もっと隠しやすい場所にしろよな……」
「はは……」

芹沢は生まれて初めて、意図的に嘘を吐いた。

続